蒼天（そうてん）

翔子は超晴れ女で、揮毫の時はいつも蒼天のもとに行われる。
席上揮毫の日は必ず晴れる。
ただ晴れるのではなく、快晴。
寒い北国でも荒れる台風の時期でも「こんな穏やかな日は稀だ」と言われる。
神社仏閣での野外の揮毫でも雨に降られたことは無い。
直前まで降っていても書く時には止む。
大きな傘マークなので、揮毫を辞めるといわれても「やります！」と決行すれば風雨も止む。
お天気は気圧の問題で決まるのではなく「気合」で決まるのだ、と翔子が教えてくれる。

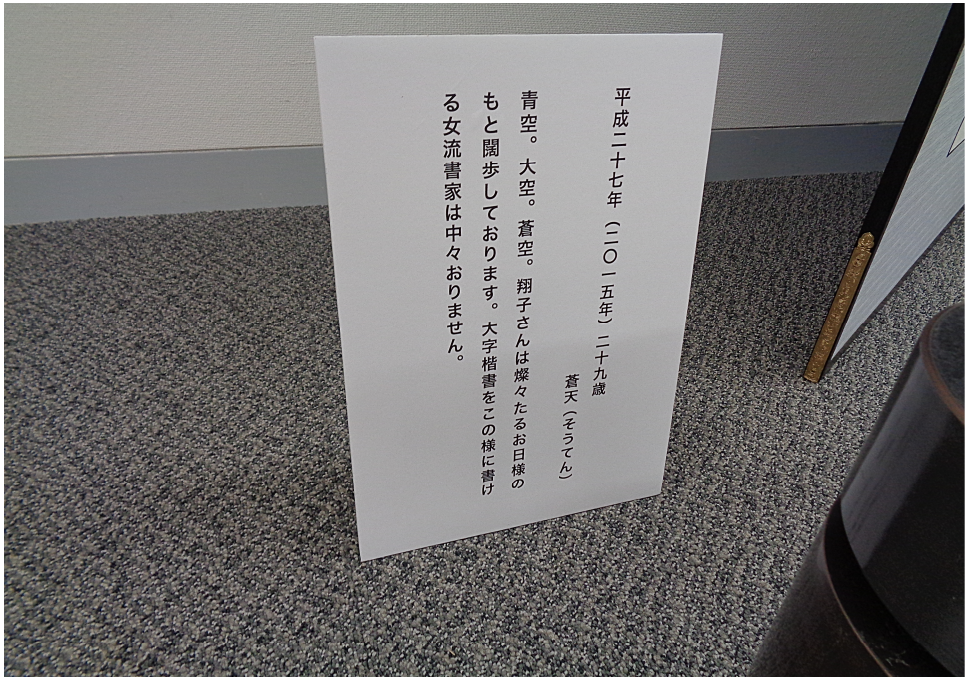
母泰子さんによる作品解説

心に光を（こころにひかりを）

野外撮影の時、見物の人に連れられて一匹の犬がいた。
翔子はその犬に丁寧に「どーぞ」と、両手を添えて自分の名刺を渡した。
犬も神妙にその名刺の前に座った。
周りの人は爆笑した。
けれども私はその光景に深く感動した。翔子にとっては犬も人間も同じなのだ。
私も人間は皆な平等で、尊厳があると思ってはきたけれど、翔子のこの心のあり様の前で、
私の平等感なんてとても陳腐に思えた。
小さなことではあるけれど心に光が満ちていれば、誰もが平等になれる。

母泰子さんによる作品解説

翔子


平成二十七年（二〇一五年）二十九歳
蒼天（そうてん）
青空。大空。蒼空。翔子さんは燦々たるお日様のもと闊歩しております。大字楷書をこの様に書ける女流書家は中々おりません。

ご協力をお願いします
撮影禁止
ご協力をお願いします
作品にお手をふれないでください